

音の散歩路



— リニアの疾風と清流の響き…山梨県・都留市 —

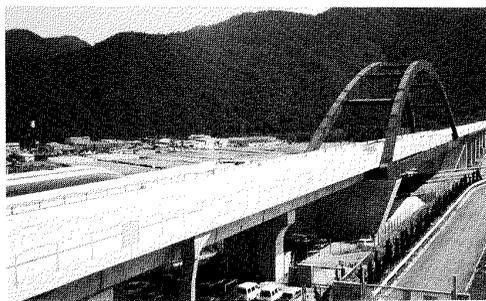
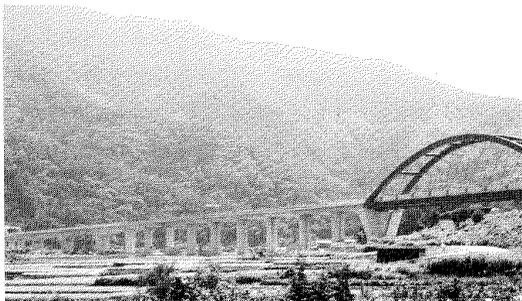


写真-1

約10cm浮上し時速500kmで突っ走るリニア中央新幹線は、どんな音を響かせて走り抜けるのであろうか？そんな疑問を抱いたのがはじまりで、新宿より高速バスに乗って一時間と少し。中央高速道路の大月インターから河口湖方面に分岐してすぐに小形山のバス停に着く。そこから高速道路に沿って田舎路を都留市方面に10分程歩くと、一直線の建造物が見えてくる。架線がないので不思議な感覚に捕われる。これが42kmに及ぶリニア実験線である。(写真-1)

小高い台地に設けられた山梨県立リニア見学センター(写真-2)からは、車両や軌道の様子が見取れる。(写真-3及び表紙)乗車体験は模型があるのでそちらで我慢…という次第である。(写真-4)リニアが眼下を通過するときが最も緊張する一瞬。来た！…と思ったら大きな空力音を残して飛び去って？いた。時速200~300kmであろう。超小型のハリケーンが眼前を通過していった様な印象である。館内に展示されたアンケート結果で超高速への期待が53

%ある反面、騒音の心配が19%を占めていたのが思いおこされる。リニアも平成11年度には実質的な実用化のめどを立てるといふ。

貴重な瞬間を体験をした後は、都留市に向うとよい。タクシーで10分程である。富士山を背景にした山間の緩やかに傾斜した土地に開かれ

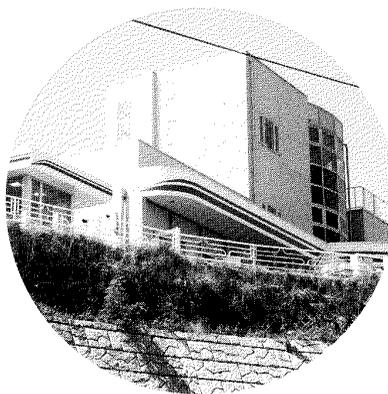


写真-2

た町であり、清流が走り抜ける町でもある。(写真-5) 散策していると、ドッドッド…という音に驚かされ、路を曲がってみると住宅街に小さな滝があることにまたまたびっくりさせられる。(写真-6) 流れは急で果てしなく奈落の底まで達する様だ。

都留は城下町として古くから甲斐絹を特産として栄えた歴史的にも由緒ある土地である。毎年9月1日には富裕な藩政時代を偲ばせる八潮祭りが開催され、葛飾北斎が下絵を描いた飾幕

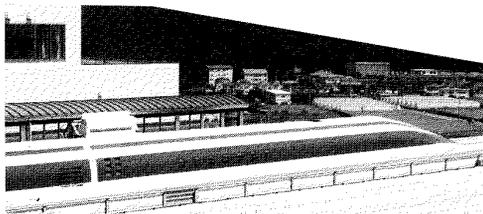


写真-3

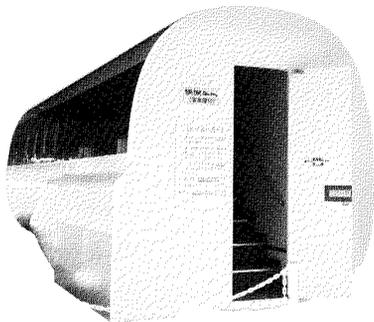


写真-4

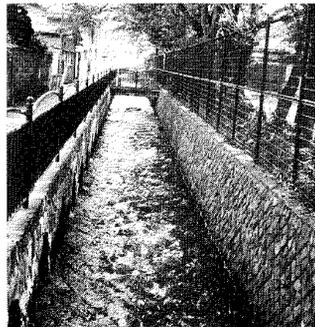


写真-5



写真-6

をつけた屋台が繰り出される。又、城下町だけに名利も多い。(写真-7は円通院)

更に面白いことに、お茶壺道中まつわるわらべ歌“ずいずいずっころばし”ゆかりの地でもある。(写真-8)6月の頃幕府の飲用茶は京都の宇治を出発し、領内を通過して江戸に向ったが、その際、茶の一部を領内の蔵に蓄え、富士の冷風を受けて夏を過ぎさせた。そして再び10月頃受け取りに来た。そんな折の茶壺道中は特別の威儀をもって行われたという。道中が近づくると沿道の民衆には様々な規制や心得が発せられた上、道中に参加する人馬の割り当てもあり、厄介もの扱いされていた。“ずいずいずっころばし”の解釈には未だ定説はないが、民衆のそんな心情と無縁ではないかも知れない。



写真-7

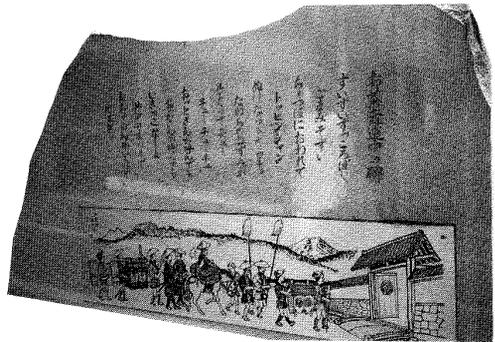


写真-8

さて、富士急行線の都留市駅から一つ隣の谷村町駅の近くにある「ミュージアム都留」に立ち寄るとその様な面白い歴史の探訪ができる。

(写真-9)俳人松尾芭蕉が天和二年冬(1682)

の江戸の大火で焼け出され、門弟であった谷村藩の国家老に招かれて桃林軒という離れに約半年間逗留していたことを知る。芭蕉が好んだという田原の滝が更に一つ先の十日市場駅近くにある。川岸を整備したためやや風情が削がれるが、それでも隠れた名瀑であった。～「勢ひあり氷消えては瀧津魚」芭蕉(写真-10)

十日市場は無人駅で何ともひなびた回りの雰囲気が心地よい。30分間隔の電車を待つ間何気なく標識を見ると、すでに富士山の裾野520mに達していた。(写真-11)夕暮れちかく、メルヘン電車に乗って大月に向えば、



写真-9



写真-11



写真-10

